

宗派により仏壇のご本尊、仏具の飾り方、日常の作法が違い、葬儀の際には、宗派によって焼香のしかた、読経、式次第が違います。

各宗派の焼香のしかた

お焼香の回数は何回？

お焼香の直前に、ふとした疑問を抱くことは多いかもしれません。ちなみに、宗派別のお焼香の作法は下記の通りです。

- 真宗大谷派（東本願寺）・・・焼香は2回、お香を頂くことはしない。
- 浄土真宗本願寺派（西本願寺）焼香は1回、お香は頂くことはしない。
- 臨済宗・・・お焼香は1回、お香をおし頂く。
- 曹洞宗・・・お焼香は1～2回、お香をおし頂く。
- 浄土宗・・・お香は1回～2回、お香をおし頂く。
- 真言宗・・・焼香は3回が一般的。
- 日蓮宗・・・焼香は3回が一般的。
- 創価学会・・・
- 天台宗・・・仏、法、僧に供える場合は、焼香3回、お香を頂いて薫ずる。葬儀の場合（新佛）は1回頂いて薫ずる。



僧侶に限らず、一般の人でも、お焼香の際には、お香を頂いて薫ずる。葬儀の場合（新佛）は1回頂いて薫ずる。

【数珠】

服装

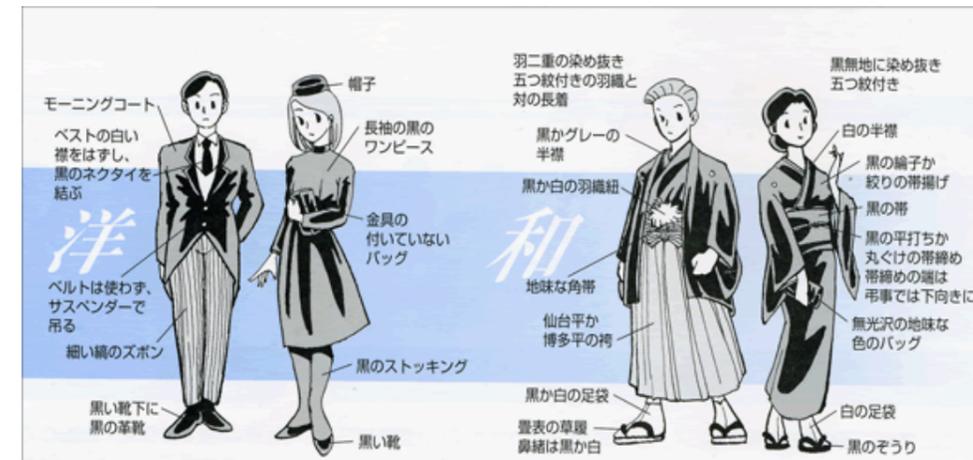
告別式の会葬に出掛ける時、男性はダブル又はシングルに黒ネクタイ、黒靴下黒靴で白のカッターシャツを着用します。また突然で用意の無い時には平服に黒ネクタイと腕に喪章をつけて会葬します。

女性は、和装であれば、黒の喪服か、地味な無地の着物に黒の羽織を着用します。洋服であれば、黒のスーツもしくはワンピースなどを着用します。

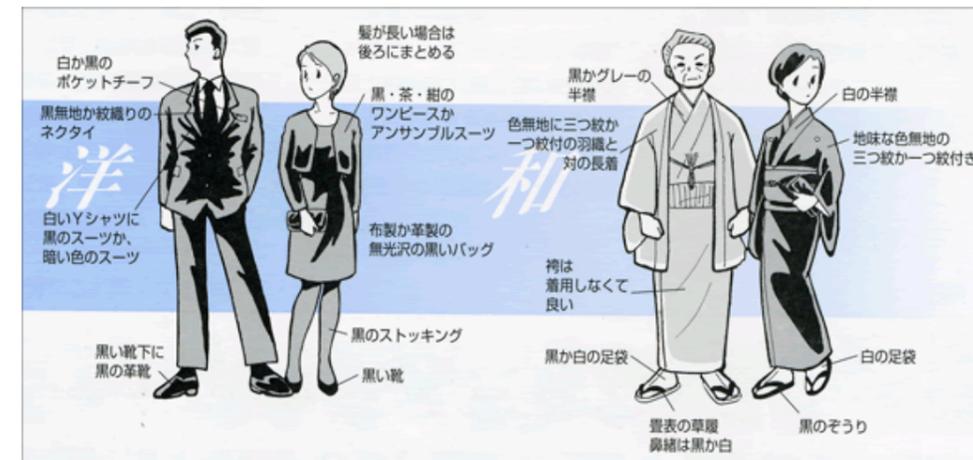
お通夜には、地味目な平服でもよいとされています。

アクセサリ（タイピン、カフスポタン、指輪、ネックレス）等は原則としてつけませんが、金製品や金色や目立つ華美なものではなければさしつかえがないとされています。

【正式喪服】

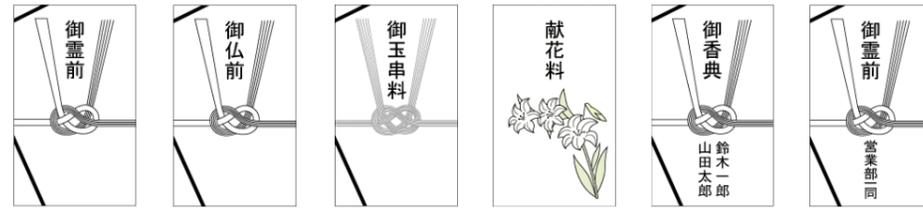


【略式喪服】



お香典、お供物の作法について

仏式では表書は御香典、御香料、御霊前などと書きます。
 神式では御玉串料、御霊前などと書きます。
 キリスト教では、御花料、御霊前などと書きます。
 カトリックの場合、御ミサ料と書きます。



正式には中包をしたうえ、さらに上包をします。金額は中包に書くのが普通です。上包だけの場合には裏側に書きます。
 お淋し見舞は通常お通夜までにお持ちになるのが普通です。(線香、菓子など)

Q. 香典袋の表書きのマナーは？

A. 表書きは墨文字でフルネームを楷書で書きます。裏には、住所金額を書きますが筆に慣れていない場合は黒ペンでも良いでしょう。名前だけでは、遺族に関係がわかりにくい場合、「大学同期生」などの肩書きを明記しておくとい良いでしょう。

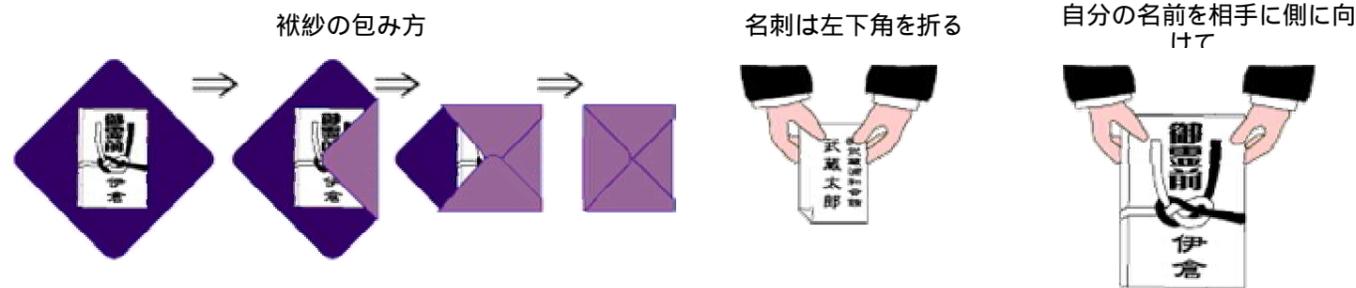
Q. 連名の場合はどうすればいいの？

A. 連名で書く場合は3人ぐらいまでにし、それ以上になる場合は、代表者の名前を書き、「外一同」「外庶務課一同」として、香典をともした人の名前と住所は便せんに一覽して書き、中に入れておきます。

Q. 香典袋のたたみ方は、どっちが上？

A. 香典袋をたたむときは、先に下をたたみ、次に上をたたみます。たたみ口が下を向くようにするのが葬儀、たたみ口が上を向くのが婚礼と覚えると良いでしょう。

【ワンポイントアドバイス】



神式葬儀

神式葬儀は仏式葬と相互に影響しあって似た所も少なくありませんが、神式葬は、正式には神葬祭といい、故人の霊が家の守護神、氏神として祭られることが大きな違いです。
 お悔やみに行った時の心得は仏式と変わりませんが、あいさつで「成仏」「供養」などといった仏式の用語は使わないようにします。仏式の焼香にあたるものが玉串奉奠です。

Q. 神式のお葬式って初めてなんです。

A. 神式の場合焼香ではなく玉串拝礼を行います。玉串は受け取ってから1回転させて「玉串案」の上に置きますが、常に両手で支え、玉串を水平に保つようにします。

- (1) まず、玉串を受け取りますが、このとき、枝の根元を右手で上からつまみ、葉先の方を左手に受けるようにして押し戴きます。
- (2) そのまま祭壇の「玉串案」の前に進み、深く一礼します。
- (3) 右手を手前に左手を伸ばし、玉串の葉先を時計の針が回る方向に90度回転させて祈念を込めます。
- (4) さらに根元を手前に引き寄せ、左手に持ち替えて根元が上になるように半回転させてから「玉串案」の上に置きます。



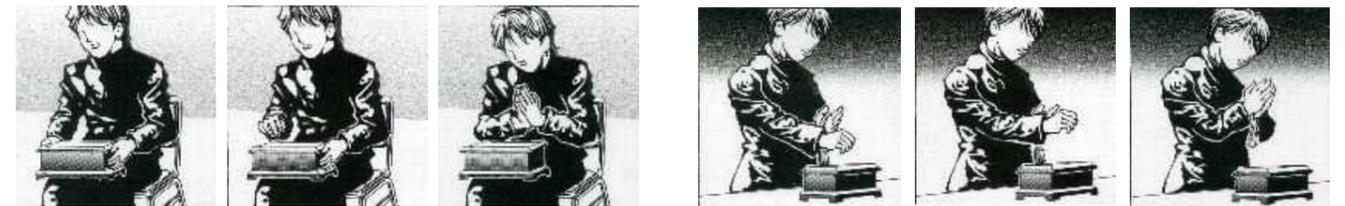
キリスト教式葬儀

キリスト教はカトリック(旧教)とプロテスタント(新教)にわかれます。カトリックでは教会の教養と儀式を重んじます。プロテスタントは聖書と個人の信仰を重んじます。
 キリスト教の葬儀はほとんど教会で行います。葬儀には最初から出席できるようにします。葬儀では式場の空気を乱さないように個人の冥福を祈ります。

無宗教式葬儀

無宗教葬とは、宗教による儀式を伴わない葬式です。故人の意思、あるいは主催する人たちの企画で自由に内容を決められます。故人の生前の業績、性格、好みを生かした式となるようにします。香典は「御霊前」「御花料」とします。

回し焼香(例)・ 葬儀 / 焼香(例)



1. 遺族に一礼 2. 香炉を正面に置く 3. 遺影に向かって一礼 4. 香をつまみ、1~3回焚く 5. 祭壇に合掌 6. 遺族に一礼 7. 香炉を回す
1. 遺族に一礼 2. 焼香台の手前まで進み、遺影に一礼 3. 焼香 4. 合掌して数歩下がる 5. 遺族に一礼、席に戻る

末期の水(仏式)

医師より「臨終です。」と告げられた時に、死者に与えるのが末期の水です。末期の水は「死の水」ともいって、もともとは逝く人の口に含まれるこの世で最後に水という意味の仏教の儀式でしたが、最近では死の直後に行われるようになりました。

新しい割り箸の先にガーゼまたは脱脂綿等を巻き、白い糸でくくりつけ、湯呑み茶碗の水に浸して、死者の唇から口中を潤します。末期の水は、故人との血のつながりの濃い肉親順に行います。

遺体の処置(自宅で亡くなった時)

シーツなどは清潔なものに取り替え、敷き布団は1枚にします。掛け布団も軽くてかさばらないものを用意します。そして湯灌の後で死化粧をします。これらは**葬儀社**の担当員が遺族に替って処置を行いますのでご相談下さい。

遺体の処置(病院で亡くなった時)

医師より臨終を伝えられると、そのあと看護婦さんによって遺体の処置がなされますので、新しい物か、洗濯をすませた着衣の用意をしておきます。

遺体の処置は約30分程かかります。居合わせなかった近親者や知らせる人への連絡をこの間にすませます。

葬儀の依頼

臨終後、葬儀社に連絡します。病院で亡くなられた場合は、**葬儀社**へ連絡して下さい。病院から自宅へ霊柩寝台車でお送りします。枕飾り(白木机、ローソク立、線香立、櫛立、抹香など)、ドライアイスを持参し、仮通夜の準備を致します。その後葬儀の相談、打ち合せを致します。

医療費の支払い

医療費の支払いは、つい取り込みにまぎれて忘れがちになりますから、死亡診断書をもらいに行くときに支払うようにし、遅くとも葬儀の翌日には、済ませる様にします。

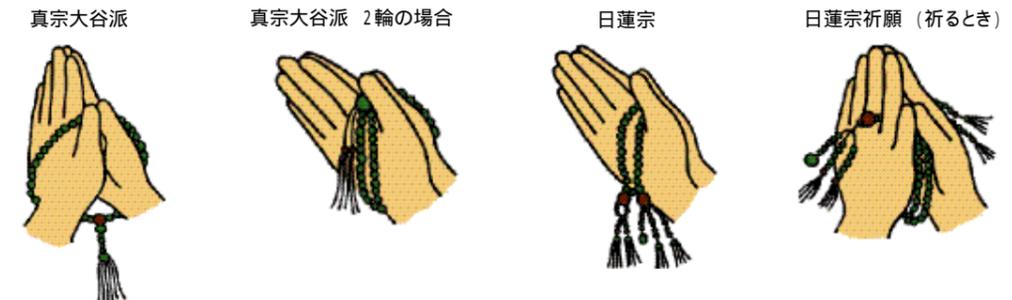
寺院等への連絡

寺院、神社、教会に葬儀、告別式の予定を告げ、先方の都合をたずねたうえで、正式な時間を決めます。その他、枕経や枕づとめ、通夜の時間も決め、依頼を済ませておきます。式場を寺院に借りる場合は前日又は当日の朝「借用料」を支払っておきます。

死亡届

死亡届の用紙は、市区町村役場の戸籍課や病院、**葬儀社**にも用意してあります。死亡届は死亡診断書もしくは死体検案書と一枚になっています。医師により死亡診断書を受け取り、死亡届に記入して届け出ます。

火葬(埋葬)許可証は、死亡届と死亡診断書を添えて、申請すると交付されます。**葬儀社**の担当員が代行も致しますのでご相談下さい。



遺体の安置

遺体は、自宅で亡くなった場合も、病院から自宅に移した場合でも同じですが、北枕にして寝かせ、手を胸の上で合掌させます。北枕にならない時は、西方を枕にします。神式の場合は、かつては東枕が一般的でしたが、現在では北枕にする場合もあります。キリスト教では特に定めはありませんが、北枕にすることが多いようです。

寺院等への謝礼

寺院、神社などへの謝礼は、宗教、宗派によって違いますし、葬儀の規模などによっても違いますから、直接たずねるのもよいでしょう。また謝礼は、すべてがすんでからでも良いとされますが、そのときは「取り込んでおりますので、お礼は一括して後でさせていただきます。」と告げておきます。

寺院への謝礼は、白封筒の表側上部に御布施と書き、表側下に個人葬であれば 家、または喪主の名前を、社葬であれば会社名を書き入れ、裏側に金額を書いて出します。

神道での謝礼は御祭料と書きます。またキリスト教での謝礼は御礼と書くのが良いでしょう。

お悔やみの挨拶

お悔やみの挨拶は、平凡でありきたりのもののほうがよいでしょう。余計なことを言うと、かえって差し障りができてしまうことも考えられるので、短くすませましょう。病状などをくどくど聞くのは失礼です。また、「なお・また・再び」のような忌み言葉と、「度々・重ね重ね」のような重ね言葉は避けるべきだと言われています。

【お悔やみの言葉例】

『この度は思いがけないお知らせをいただきました。ご家族の皆様はさぞかしご無念のこととございましょう。お察し申し上げます。私にできますことがありましたら何でもお手伝いいたしますので、何なりとお申し付けください。』

『この度は誠にご愁傷さまでございます。突然のことでさぞやお力を落とされていることと存じます。』

『突然のことでお慰めの言葉もございません。心よりご回復を祈っておりましたのに、本当に残念でなりません。』

『この度は誠に残念なことになりました。心からお悔やみ申し上げご冥福をお祈りいたします。』

忌み言葉（禁句）

例1 重ね言葉 ・重ね重ね ・またまた ・たびたび ・返す返すも ・再三など

例2 仏式葬儀での忌み言葉 ・浮かばれない ・迷うなど

例3 仏式葬儀ではよく使われるが、他の宗教では注意が必要な言葉
・成仏してください ・供養

さらに、仏式でも浄土真宗では「冥福」「霊前」などの言葉は使いません。

世話役の依頼

葬儀を執り行うにあたり、遺族だけですべてを取り仕切ることではできません。親戚、友人、隣組、職場の方などに世話役をお願いします。まず、世話役代表を決めて、その方に各世話役の割振りや依頼を委ねます。また世話役代表の補佐として親戚から1～2名選ぶのが良いでしょう。

世話役代表(総務係)・・・各係りの動きが円滑にゆくためにも、要となる人です。
親族あるいは、お手伝いくださる中で主になる人を選びます。

会計係・・・葬儀に関する現金の一切、香典の管理から現金の出納、清算までをとりしめます。当座の費用として10～15万円預ると良いでしょう。

受付係・・・町内又は会社の方をお願いしますが、会葬者が多いと思われる場合は各関係別に受付を作ると良いでしょう。受付係は、通夜を含め、会葬者名簿、香典、供物などの受付を一切引き受けます。

携帯品係・・・弔問客、会葬者が控室、式場へ入る前に携帯品を預る係です。

会場係・・・式場の順路を明示したり、家の掃除、片付けをしていただく係です。
(葬儀社がお手伝いします)

接待係・・・僧侶、葬儀参列者を控室へ案内し、湯茶、食事の接待をします。
又、式の始まる前には、式場へ案内します。

供養係・・・会葬礼状や、粗供養品を渡す係です。

交通係・・・火葬場に向う随伴車の手配、駐車場の確保、管理などを行います。
葬儀の規模によって、係の人数の調整をします。小規模の場合には、兼務することもできます。

死亡通知

危篤や死亡直後の通知は、たとえ目上の人に対しても電話連絡でかまいません。死亡直後の知らせは家族が親族全体にしなくとも近親者から必要な親族にするのがなわしです。そのほか、死亡通知をしなくてはならないのは勤務先、学校、仕事の関係先、関係団体、隣近所などです。特に隣近所への通知は早く行います。広く知らせる時は、新聞に死亡広告を出します。

家の中の整理

神棚があれば、半紙もしくは白い布で覆います。
 仏壇の中の打敷きを白に替え、花瓶の花は密(しきみ)に替えます。
 式場となる部屋の家具を運び出し、壁の額も外します。
 祭壇を飾る前に、押入れの中の必要な物を取り出します。貴重品は信頼できる方に預けておきます。
 玄関、庭の掃除をしておきます。

故人の写真、喪服の用意

写真は大きくはっきり写っているものを選びます。修整、着せ替えもできます。
 喪服については、サイズの確認をしておきます。葬儀社で貸衣装も手配できます。礼服には、喪章の必要はありません
 若い方で礼服のない方は、ダークスーツに喪章でよいでしょう。
 学生については制服が良いでしょう。

弔問客への対応

喪主は遺体のそばについていて、弔問客の挨拶を受けます。
 遺族、ことに喪主は、弔問客を玄関まで出迎えたり、見送る事をしなくても失礼にはなりません。丁寧にお迎えしたい時には、喪主の兄弟か親戚の方が迎えると良いでしょう。
 人手が足りなければ接待をしなくても良いのですが、茶菓は用意するのが良いでしょう。
 弔問客のお悔やみの言葉には丁寧に答え、親しい方には故人との最後の対面をしてもらいます。
 茶菓の用意も必要ですが多くはいりません。弔問客の淋見舞のお菓子を使います。

葬儀の種類



枕経(仏式)

遺体の安置、枕飾りの準備が整ったところで、僧侶を招いて枕経を誦んでいただきます。この時に通夜、葬儀、告別式(本葬)の依頼を確認しておきます。菩提寺が遠方の場合には、月々の祥月命日に来られる僧侶に誦んでいただきます。

納棺

納棺は枕経、死化粧が済んでから遺族、親族の手で行います。脱脂綿にアルコールをひたし、頭の方から足の方へと拭いてゆきます。着衣を経帷子に着せ替え、柩に納めます。この時に故人が生前愛用していた物、好んでいた物を一緒に納めます。金物、陶器、ガラスなどは燃えないので入れないようにします。なお、釘打ちの儀式は、出棺の際に行います。納棺が終わった後に布団を片付けます。
 納棺、死化粧は、必要なものを持参し、葬儀社がいたしますのでご相談下さい。

通夜

通夜の日時は、葬儀の前夜になり、午後7時～9時まで位の時間帯でとり行います。葬儀日が友引などで日が延びるときは、前々夜に仮通夜を近親者で行います。弔問客が多くなる時は、会社関係、町内、学校などへの連絡で時間をずらすようにします。弔問客より頂いた、お淋見舞の寿司、饅頭などは通夜の席で使います。枕花、果物籠、提灯は、見える所に供えます。供える順は、ふつう祭壇に近い方が上となります。仏式ではローソク、線香を絶やさぬようにします。
 冬期は通夜の時間を午後6時～8時までの時間で行なうことが多いようです。

僧侶への対応

通夜が始まる前、お迎えし、控え室で休憩してもらいます。
 通夜が終わり控え室に戻ったら、お礼の挨拶をし、茶菓でもてなします。
 通夜ぶるまいの料理をすすめ、帰るときに「御車代」を渡します。
 通夜ぶるまいをしないときは、「御膳料」もあわせて渡します。

焼香順位

焼香順位は親族関係、土地の風習などで異なりますので、親族で話し合いの上決定します。喪主、遺族、来賓、親族の方などの順で焼香します。別表27項の親族表を参考にして下さい。

弔電の整理

届いた弔電はあらかじめ整理しておき、弔電を読む順も決めておきます。読みにくい文や名前は、読み易いように書直しておかれるとよいでしょう。

火葬場への随伴車、人員、配車の確認

出棺直前になって手間取り、出棺が遅れたり、会葬者を待たせることのないよう、あらかじめ決めておきます。

寺院などへのお礼の用意

多くの場合、葬儀終了の後、世話役または親族代表が渡します。

直前の準備

身のまわりの整理をし、着替えの必要な方は喪服に着替えます。式場の整理をします。座布団は寺院の物だけを残し、他は片付けておきます。式場ではジュータンを敷く事も多くありますので、葬儀社の担当員にご相談下さい。

葬儀、告別式(本葬)の進行

葬儀、告別式の順序や形式は、宗教、宗派により、またその地方の習慣などによっても異なります。葬儀社の担当員との打合わせを十分行い、詳しい説明を受けておきます。

焼香(仏式)

仏教の宗派により焼香作法が違いますから、僧侶に教えていただくのも良いでしょう。【葬儀のマナー項目 P1】に詳しい作法が記されていますので、参考にして下さい。

玉串奉奠(神式)

神官、(または親戚、お手伝い)より玉串を渡されると、右手で根元を、左手で枝先を持ち、祭壇の前に進み、神前で一礼します。玉串を正面で構え、左手で根元を持ち、右手を枝先にそえ、左手の根元を祭壇の方に向けます。右手で送るように玉串台に置き、半歩さがります。二礼、二拍手、一礼をしますが、葬儀の時はしのび手にて音が出ないようにします。また天理教では、二礼、四拍手、二礼、をします。

献花(キリスト教)

神父(カトリック)、牧師(プロテスタント)(または親戚、お手伝い)より花を渡されると、枝を左手で受けるように持ち、祭壇の前に進みます。根元を祭壇の方に向けて右手で送るように献花台に置き、手を合わせて黙礼してさがります。

お通夜・告別式・・・どちらに参列？

もともとお通夜は家族やごく親しい方々が付き添うもので一般弔問は告別式に参列・会葬するものですが現在ではお通夜に参列・弔問するのが一般的です。あなたのご都合でどちらかに参列されれば良いかと思えます。当然、両日に参列されてもかまいません。

出棺

葬儀、告別式(本葬)が終了しましたら、まもなく出棺です。故人が生前好んだ物、お供えに頂いた花を棺に納めて、最後の別れをします。そのあと、棺のふたを閉め、釘打ちの儀式を行います。喪主より釘の頭を石で軽く打っていきます。釘打ちの儀式が済まれた方は表まで出て出棺を待ちます。棺は葬儀社の担当員によって庭先まで吊り出しますが、そのあと親族男子によって霊柩車まで葬列を作って向います。孫吊りとして孫によって行なう場合もあります。棺は足を先にして霊柩車に入りますが、扉を閉めたところで喪主、あるいは親族代表が会葬の御礼を述べます。挨拶が終わりましたら、各々車に乗り、準備がととのいしだい出棺します。

高級な棺の場合は釘打ちの儀式をしません。(棺が厚く作ってある都合)

出棺の挨拶

会葬していただいたお礼、故人に対する生前のご厚誼への感謝、今後も遺族に対して変わりになくご交誼をお願いしたいという内容で、葬儀委員長、喪主、または親族代表によって簡単な挨拶をします

挨拶例1：遺族を代表いたしまして、皆様にご挨拶を申し上げます。本日はご多用中にもかかわらず、ご会葬を賜り、ありがとうございました。故人生前中はひとかたならぬご厚誼にあずかり、いまここに最後のお見送りまでいただきまして故人もさぞかし感謝していることと存じます。どうか今後も変わりなきご交誼を賜りますようお願い申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

挨拶例2：おかげさまで、本日の葬儀もとどこおりなく済ませることができました。故人もさぞ感謝していることと存じます。ありがとうございました。

葬儀後の挨拶回り

葬儀に際して、いろいろお世話になった方には、できるだけ早い機会に喪主がお礼の挨拶にまわります。このときは略礼服を着ることが多いようです。

挨拶例：昨日はいろいろとお世話になりまして、ありがとうございました。おかげさまでとどこおりなく葬儀をすませることができました。

葬儀後のお礼

世話役、お手伝いの人には精進落としで食事をふるまってすませますが、帰りには供物等を分けて持ち帰って頂くこともあります。別に品物を用意することもあります。お礼の品は石鹸、砂糖、タオルなどあまり高価にならない物を出すことが多いようです。お礼の品には、黒白または銀の水引ののし紙をかけ、「志」「御礼」と表書きをします。礼金の場合は商品券が多いようです。

謝礼

寺院、神社、教会への謝礼は、金額に規定があればそれに従いますが、はっきりしていない時には、葬儀社の担当員に相談するのがよいでしょう。謝礼金は不祝儀袋または白無地の封筒に入れ、仏式では「御布施」「御経料」神式では「御祭礼料」キリスト教では「御礼」などと書きます。また式場を寺院や教会で借りた時は「借用料」「御席料」「志」とします。

各種礼状

会葬礼状・・・一般会葬者への礼状で、告別(本葬)式場の出口で粗供養品と一緒に会葬者に渡します。

忌明け前礼状・・・香典、供物をお断りして葬儀を行った場合、葬儀参列者に参列のお礼の礼状を出します。

忌明け後礼状・・・忌明けの法要が済んだ事の報告を兼ねて香典返しをする時に品物を添えて出します。

香典返し

香典返しは忌明け後（五七日または七七日）に香典を頂いた方へのお礼として行うもので、ふつう「半返し」といって香典としていただいた額の半分ほどの品物を用意します。一家の主人が亡くなった場合は3分の1程の品物で良いでしょう。ただし、香典は本来故人の冥福を祈って手向ける香の代わりに霊前に供えるもので、不幸の家への相互扶助の意味も込められていますので、お返しをしなくても忌明けの挨拶状に感謝の心を記せば失礼にはなりません。一部の地域（高山）では会葬礼状とともにお返し（即返し）をされることもあります。一般的には、香典返しの挨拶状に忌明け後の礼状を用います。適した品物としては、ふだん使われる日用品がよく、シーツ、バスタオル、座布団カバーお茶、砂糖、石鹸、漆器などが多く使われます。

遺品の整理

あわただしかった葬儀も済み、親類の方たちも帰って、親族だけになってから遺品の整理をしますこの時形見分けのことも頭に入れておきます。故人の勤務先などにはできるだけ早く出かけて、私物を持ち帰ります。ロッカーの鍵なども確認して返すのを忘れないようにします。また仕事上の資料、友人から借りていた物が自宅にあれば、この時に持参します。職場の遺品整理に出かけるときに、喪服を着ていく必要はありませんが、喪に服す期間ですのできちんとした服装で地味な方が、良いでしょう。

寝具の処理

故人の使用していた布団は、数日間、日影干しすると言われて来ましたが、最近はふとん屋で洗ったり、仕立て直しをしたりする事が多いようです。病気によっては消毒したり、焼却する必要もあります。焼却する場合には、焼却場に持参します。

香典金額

香典の金額は「両親・兄弟・姉妹」などは5万円～10万円、親戚では1万～2万円が目安でしょう。尚、「友人・ご近所・会社関係」などは5千～1万円が一般的です。

金額で迷う方は同じ立場あるいは親戚と事前に相談し金額を合わせておくのが無難でしょう。

形見分けにする遺品

故人が日頃愛用していた身の回りの品、大切にしていた品を形見分けの遺品とすることが多いようです。たとえば、衣類、装身具、茶道具、盆栽などです。なお、今はいろいろと物が豊富な時代ですので、故人が大切にしていた物でも、あまりいたんでいたりする場合は贈られた方も困る事もありますので注意します。故人が愛用していた着物などをネクタイ、ハンドバックなどに作り直して、お使いになる方もあります。

形見分けをする範囲

故人をしのび、その思い出とするために贈るのが形見分けですので、ごく親しい近親者や親戚、友人でないと失礼になりますから、その品を日常生活で愛用していただけるよう、故人の遺志をくみながらそれぞれの方にふさわしい物を選んで贈るようにします。

形見分けをする時期

仏式では五七日（35日）か七七日（49日）、神式では五十日祭の頃に行ないます。またキリスト教では形見分けという習慣はとくにありませんが、七日、三十日、年毎の命日の追悼の日に行なう人も多いようです。しきたりとしては形見分けは包装しないでそのまま渡します。

故人の愛用していた品物であること、またその品の来歴などを伝えるのが良いでしょう

忌と服

近親者に不幸があった時、死亡したその日より一定の期間を喪に服しますが、その期間を忌と服に分けます。忌は、人の死は汚れたものであり身内に死者を出した者は、日常の行為を慎んで身を清めなければならないとする事に由来しますが、現在では死亡直後の謹慎の意味が強いです。服は、不幸のあと喪服を着て身を慎むということから、その後一定の期間慶事を慎むという意味になっています。五七日（35日）か七七日（49日）までは神社の境内に入れないといわれ、結婚式の招待がある場合は欠席されるのが良いとされていますが、止むを得ず出席される場合は挙式場には入らず披露宴のみ出席されるのが良いでしょう。

忌明け

仏式では五七日または七七日をすぎると死者の霊がその家から離れるといい、この日を忌明けとします。神式でも五十日祭をこの日にあてています。またキリスト教では忌明けはありません。忌明けの日には、親類や友人を招いて故人の法要を営みますが、実際の忌明けの日よりも前に行なえば、日数が変わってもかまいません。なお、香典返しや形見分けもこの日に行い、葬儀の際に神棚や額などに張った白紙も取り外します。また、それまで遺影とともに安置していた白木の位牌は寺に納め塗りの位牌や繰出位牌に替えます。

年賀欠礼の挨拶

喪中に新年を迎える場合は年賀状を出しませんので、例年、賀状を出していた相手には、1月の終りから12月の初めの間に年賀欠礼の挨拶状を出します。
年賀欠礼の八ガキのご相談は葬儀社にお申し出下さい。

遺言と遺言書

遺言は法律に定められた形式に従って書かれていないと無効になります。そのために次のような方法があります。

自筆証書遺言・・・本人が全文を書き、日付、署名、捺印をします。

公正証書遺言・・・公証人に遺言の内容を話し、公証人が遺言書を作ります。

秘密証書遺言・・・遺言書に署名、捺印し、封筒に同じ印で封印して公証人に届けます。

死亡直前の口頭遺言・・・三人以上の証人が立ち合い、そのうち一人が口述筆記し遺言者と証人が内容を確認し署名、捺印します。遺言は出来るだけ早く家庭裁判所へ届けます。

相続の仕組み

1. 相続とはどういうことか

相続とは人（被相続人）の死亡によって開始し、相続人は相続開始の時から被相続人の財産に属した、いっさいの権利義務を継承することです。

2. 相続人とは（法定相続人）

被相続人の財産を相続することができる人は、民法で決められています。これを「法定相続人」といいます。

法定相続人

(1) 配偶者（すべての組み合わせの場合にも相続人になる）

(2) 第1順位 子及びその代襲者。

胎児・・・既に生まれた者とみなす。

代襲者・・・被相続人の子が相続開始以前に死亡したとき。

相続欠格事由に該当し、もしくは排除によって相続権を失ったときは、その子が代襲して相続人となる。

(3) 第2順位 直系尊属（直系卑属がない場合）

(4) 第3順位 兄弟姉妹（直系卑属・直系尊属がない場合）

兄弟姉妹の子（甥・姪）までは代襲権がある。

3. 法定相続分

(1) 第1順位の場合

配偶者が2分の1 子が2分の1（数人いる場合は各自の相続分は相等しい）

(2) 第2順位の場合

配偶者が3分の2 直系尊属が3分の1（数人いる場合は各自の相続分は相等しい）

(3) 第3順位の場合

配偶者が4分の3 兄弟姉妹が4分の1（数人いる場合は各自の相続分は相等しい）

納骨、埋骨

仏式では、ふつう火葬にしたお骨をいったん自宅に安置し、初七日から四十九日までの七日目ごとの法要のうちで、都合の良い日に納骨、埋骨します。一番多いのが四十九日です。しかし、新しくお墓を買って墓を作る場合や、郷里の墓地へ埋骨する為に長い日数がかかる場合もあります。こんな場合には、お寺などの納骨堂に仮納骨してもらい、一周忌又は三回忌に埋骨します。神式、キリスト教式では、本来が土葬で葬儀の日に埋葬をすませていましたが、現在では火葬がほとんどの為、神式では五十日祭、キリスト教のカトリックの場合は七日目の追悼ミサの日か、翌月の召天記念日（追悼の日）、プロテスタントでも翌月の召天記念日などを選んで、納骨、埋骨されるのが多いようです。

法要

法要の営み方は宗教、宗派により、また地方の風習、家の格式や親族のしきたりによっても違うので、年長者などにも相談して家にふさわしい形をとるのが良いでしょう。

初七日：初七日の法要は葬儀式の二、三日後にあたりますので、葬儀式の日に行なわれる事が多くなりました。中陰飾を用いて（遺骨、遺影、三具足等を飾る）、葬儀の続きのような雰囲気の中、近親者、親戚、親しい友人、知人を招いて、僧侶にお経をあげてもらいます。そのあと、茶菓や料理などでもてなします。

五七日：二七日（14日目）三七日（21日目）四七日（28日目）は僧侶を呼んで読経してもらいます。内輪で済ませる事が多いようです。五七日（35日目）は、死者が冥土で5回目の審判を受ける大切な日として、親類縁者、僧侶を招いて初七日と同じように手厚く法要を行ないます。また、宗派によっては、五七日を忌明けとする場合もあります。

七七日：七七日（49日目）は、仏教ではこの日の審判で死者の運命が決まるといわれ忌日のなかでも重要な日とされています。さらに忌明けの日でもありますから、たいていの場合、この日に近親者、友人、知人、僧侶を招いて埋骨式をし、そのあと料理などを出し、大がかりな法要になります。また、仏壇がなかった家では、四十九日の忌明けまでに新しく仏壇を用意される事が多いようです。

百か日：百か日（100日目）は、近親者、友人、知人、僧侶を招いて法要を行ないますが、内輪にすませる事が多くなりました。

新盆：故人の死亡後始めて迎える新盆の供養は丁重に営みます。お盆の間は、精霊に自分の家を教えるために、仏壇の近くや、軒先に、岐阜提灯や新盆燈籠を飾るとされています。なお新盆には、僧侶に読経を頼みますが、お盆は僧侶がもっとも多忙なときですから、早めに依頼します。

注意 真宗大谷派では新盆はしません。

忌明け挨拶例：本日はよくお参り下さいました。葬儀の際はいろいろお世話になりまして有難うございました。今日お陰をもちまして滞りなく満中陰を勤めさせて頂く事が出来ました。皆様のお参りに故人も定めし満足している事と存じます。まことに有難うございました。

年忌法要

死亡した翌年の祥月命日（死亡した日と同月同日）に、一周忌を行い、一周忌の翌年の満二年目に、三回忌法要を行ないます。三回忌のあとは七回忌、十三回忌、十七回忌、二十三回忌、二十七回忌、三十三回忌、三十七回忌、五十回忌、百回忌となり、そのあとは五十年目ごとに法要を行ないます。

一周忌までは、近親者、友人、知人、勤務先関係の方などかなり多くの人に出席を頼みますが、三回忌からは、しだいに関係者の深い方だけにゆきます。

大がかりな法要の場合は、案内状をあらかじめ出しますが、法要は葬儀よりも列席者が少ないのがふつうですから、一般には電話連絡やハガキで招待する方の出欠を確かめても良いでしょう。

法要は、寺で行う場合と自宅で行なう場合がありますが、いずれにしても、僧侶に頼んでお経をあげてもらい、参列者が焼香拝礼したあとで墓参りをします。そのあとで酒や料理でもてなしますが、自宅で開かず料理屋で開かれる事が多くなって来ました。

仏壇購入時期

御本尊をお迎えになるのに、特に時期は問いません。私たちをお救いくださる仏様をお迎えするので、思い立ったら早い方が良いと思います。一般にご法事やお盆、お彼岸に合わせて新調される事が多いようですが、特にそれにこだわる必要はありません。ご家庭の精神的基盤となるお仏壇を是非ご安置して下さい。

仏壇購入の注意点

仏壇は部屋に適したものを選びます。部屋の大きさ、他の家具とのつり合いを考えて、小住宅であれば小さい仏壇が良いでしょう。

仏壇には檜や杉を使い漆塗りや金箔で仕上げた塗り仏壇と、黒檀、カリン、桜、桑などを使った唐木仏壇があり宗旨、宗派によって異なり、仏壇を購入する時に親族の方々から少しずつお金を出し合ってもらい、そのお金を購入時の費用に使うと良いとされています。当地方では真宗大谷派が多いせいか、金箔の塗り仏壇が多く用いられています。値段は、大きさ、素材、造り、塗り、金箔などによって大きく違いますが、30万円位からあります。

仏具をそろえる時は、線香立て、花立て、燭台以外は宗派によって違いますから、間違いのないようにします。特に御本尊を購入する時などは、菩提寺に相談するのが良いでしょう。時があれば忌明けの法要の時にしてもらっても良いでしょう。

新しい仏壇を購入したならば、仏壇開きを行い、親戚を招いて酒、食事を振る舞います。食事の前に精入れ（しょういれ）の経をあげてもらいます。

墓地

墓地には、各都道府県、市町村が管理している公営墓地と、宗教団体、寺院、教会などが管理している市営墓地とがあります。墓地を選ぶときの条件には、交通の便が良い事、静かな環境にある事、日当たりが良く、縁も多い事などがあります。また墓地を管理する業者（霊園など）が信頼できるかどうかも大切です。菩提寺や神社、教会など葬儀のとき世話になった所で相談されるのも良いでしょう。

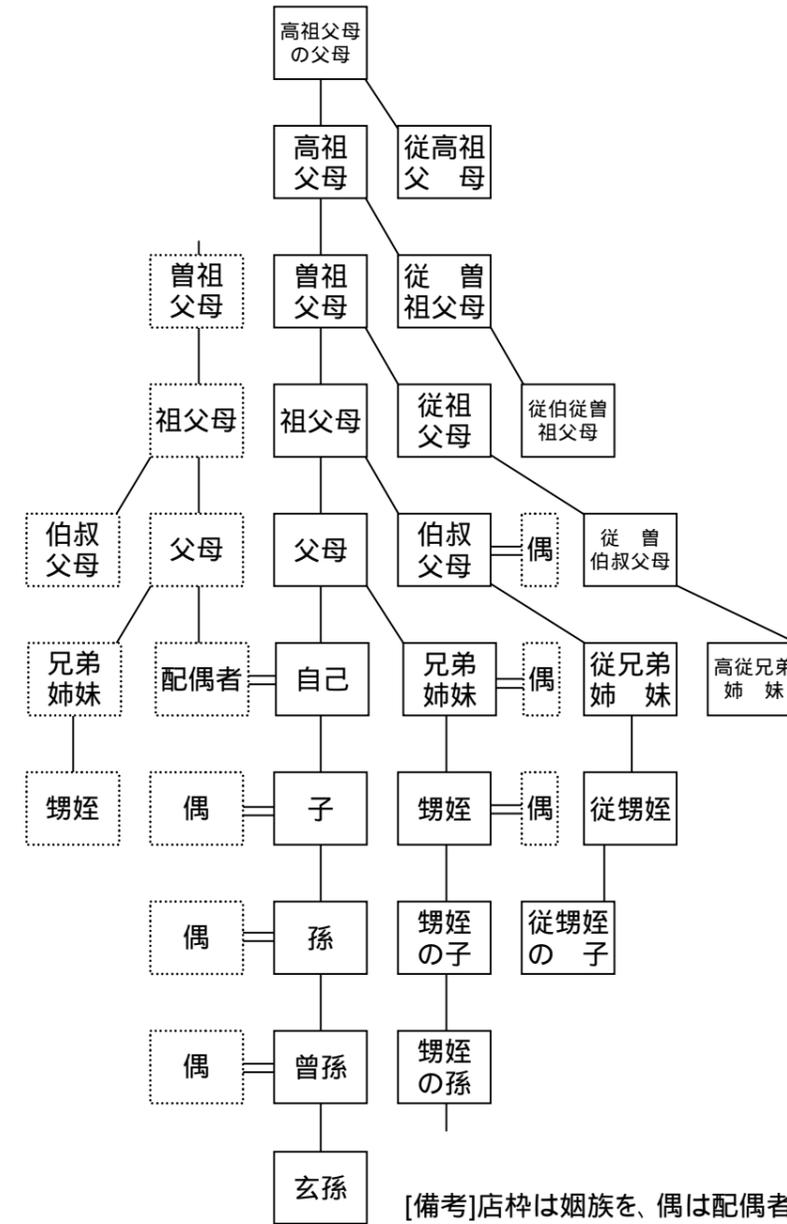
墓石

墓石は仏式では、一周忌か遅くとも三周忌ごろまでに建てます。墓の形も最近では、宗教や様式にこだわらないものも増えて来ましたが、角塔型、五輪塔型、宝印塔などがあります。神式では自然石を利用した墓や円墳式のものを作る事もあります。またキリスト教式では、十字架をつけます。
墓を建てた時は、僧侶に開眼法要を営んでまいります。

年忌法要

死亡した翌年の祥月命日（死亡した日と同月同日）に、一周忌を行い、一周忌の翌年の満二年目に、三回忌法要を行ないます。三回忌のあとは七回忌、十三回忌、十七回忌、二十三回忌、二十七回忌、三十三回忌、三十七回忌、五十回忌、百回忌となり、そのあとは五十年目ごとに法要を行ないます。
一周忌までは、近親者、友人、知人、勤務先関係の方などかなり多くの人に出席を頼みますが、三回忌からは、しだいに関係者の深い方だけにゆきます。
大がかりな法要の場合は、案内状をあらかじめ出しますが、法要は葬儀よりも列席者が少ないのがふつうですから、一般には電話連絡やハガキで招待する方の出欠を確かめても良いでしょう。

法要は、寺で行う場合と自宅で行なう場合がありますが、いずれにしても、僧侶に頼んでお経をあげてもらい、参列者が焼香拝礼したあとで墓参りをします。そのあとで酒や料理でもてなしますが、自宅で開かず料理屋で開かれる事が多くなって来ました。



焼香順位の例

- 父が死亡した場合
 - 喪主
 - 母
 - 喪主の妻と子
 - 来賓（会社、友人、町内）
 - 喪主の兄弟夫妻と子供
 - 喪主の姉妹夫妻と子供
 - 故人の兄弟、姉妹夫妻
 - 喪主の母の兄弟・姉妹夫妻
 - 喪主の妻の両親
 - 喪主の兄弟・姉妹の嫁先両親
 - 従兄弟・従姉妹夫妻
-
- 母が死亡した場合
 - 喪主
 - 喪主の妻と子供
 - 来賓（会社、友人、町内）
 - 喪主の兄弟、妻と子供
 - 喪主の姉妹夫妻と子供
 - 故人の兄弟・姉妹夫妻
 - 喪主の父の兄弟・姉妹夫妻
 - 喪主の妻の両親
 - 喪主の兄弟・姉妹の嫁先両親
 - 従兄弟・従姉妹夫妻
 - 故人の両親
 - 故人の夫